港まちづくり協議会 2019年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2019

港まちづくり協議会 2019年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2019

Introduction

港まちづくり協議会では、この活動を応援いただいている皆様に2019年度の活動成果をご報告するにあたって、Web＋冊子という2つの報告書をご用意しております。Web版では、数々の写真をご覧いただきながら、防災、子育てからアートプロジェクトの多岐に渡る活動を余すことなく。そして、この冊子版では、機関紙であるフリーペーパー「ポットラック新聞（タブロイド／かわら版）」の取り組みに絞りご紹介をしています。私たちの現在地は、まだまだ道半ばではありますが、全国でさまざまな地域活動に取り組む皆さんの何らかのヒントになれば幸いです。

Contents

03 港まちで私たちがつくってきたフリーペーパー

07 各地のフリーペーパーに学ぶ

08 編集メンバー座談会

09 数字で振り返る2019年度データ

港まちづくり協議会 2019年度WEB報告書

WEB | www.minnatomachi.jp/report/2019.html

港まちで私たちがつくってきたフリーペーパー

私たちの活動を伝える機関紙としてのフリーペーパー。その制作を振り返ってみると、かれこれ10年近い歳月が流れています。ここでは、2011〜2015年の「ぶらり港まち新聞」から2017年〜現在の「ポットラック新聞」までのプロセスをご紹介します。

| クロニクル |

ぶらり港まち新聞の足跡をたどる

2011年12月	ぶらり港まち新聞創刊号発刊
2015年 3月	ぶらり港まち新聞10号発刊
2015年12月	ぶらり港まちBOOK発刊

「ぶらり港まち新聞」の主役はあくまでも「まちの人々」。そして、そのモットーは情報を消費するのではなく、育てることでした。人と出会いまちを知る。新聞づくりを通し私たちの中にも港まちへの深い愛着が育まれました。また港まちの誕生100周年を記念して、新聞づくりの集大成ともなった「ぶらり港まちBOOK」をまとめることができました。

新聞 | タブロイド判16頁／フルカラー／年3回（はる、なつ、ふゆ号）／7,000〜12,000部／10号まで発刊
BOOK | 変形サイズ182×241mm116頁／フルカラー／1号のみ／4,000部発刊

次なるメディアは何を目指すのか？

港まちポットラックビルオープン

2015年10月、港まちポットラックビルという新たな拠点がオープンした港まちには、MAT,Nagoya*によるアートプログラムもスタート。まちづくりだけでなく、アートを始め、デザイン、建築、音楽など多様な層の人々が訪れるようになりました。

*名古屋の港まちを舞台にしたアートプログラム

「まちの魅力に出会うフリーペーパー展 ‒まちとツナガル僕らのツール ‒」の開催

2017年1月、そうした新たな人とまちをつなげるためのフリーペーパーの在り方を探るために「まちの魅力に出会うフリーペーパー展 」を開催しました。

ポットラック新聞スタート！ -1つのメディアを2つのカタチで

2017年6月	編集会議スタート！
2017年7月	かわら版発刊
2017年9月	タブロイド発刊

フリーペーパー展で出会った新たなメンバーも加わり、いよいよ編集会議がスタート。全国から集めたフリーペーパーをずらりと並べてのロングミーティング。目を引いたのは、意外にも個人的な視点から制作された手作り感あふれる壁新聞のような媒体でした。しかしそのスタイルでは発信したい情報は収まりきらない。熟考の末、私たちは8ページのタブロイドを全国に向けて年3回、A3裏表のかわら版を地域限定に毎月発行するというスタイルを選択しました。

| フリーペーパー解体新書① |

ポットラック新聞 タブロイドとは？

媒体概要
タブロイド判8ページ／フルカラー／年3回発行／12,000部／2020年3月までに9号を発刊

港まちポットラックビルという新たな拠点で発信される私たちの活動を単にPRするのではなく「伝わる」情報として全国へ発信していくための媒体です。まちの内と外をつなぐことを目標に、毎回さまざまな工夫を凝らしています。

タブロイドの特徴
- 港まちを舞台に展開する多岐に渡った活動を俯瞰し、その意義を読者と共に再考していくような紙面が特徴的。
- 編集、ライティング、デザイン、カメラ、アートなどそれぞれの専門家が職能を発揮するエキサイティングなコラボワーク。毎回のロングミーティングが苦し楽しい。
- 活動紹介をきっかけにしながらも、毎回の紙面にはなんらかの形で街の人たちが必ず登場。それは、活動だけでなく街の人々との出会い直しの機会にもなっているのかも?!

1 毎号、誰にとっても身近な問いやキーワードを特集タイトルに。それを象徴する表紙ビジュアルを港まちで撮影。

2 この号の特集は「おばあさん」。「おばあさんのランチin港まち」のレポート記事に、港まちに暮らす90歳オーバーのおばあさんたちの生き様の紹介も。

3 見開き連載企画「港まちのにぎやかな民俗誌」。オーラルヒストリーともいえる真面目なお話と猫のイラストによるバランスが絶妙。

4 最終面は小ネタ満載。定番企画の街のグルメ紹介もお店じゃなくて個人宅で敢行！

COLUMN

距離を縮めるチケットのような

岡西康太（港まちづくり協議会）

2015年に港まちポットラックビルがオープンを迎え、名古屋港駅の一つ前にあるこの築地口にもたくさんの方が訪れるようになりました。しかしながら、このビルを訪れる人が、まちを散策したり、ビル以外に継続的にまちを訪れるような風景はまだそれほど見られません。
私がこのまちで働くようになり、早7年。1年目からフリーペーパーの担当をしながら見えてきたのは、簡単に知ることのできないこのまちの面白さや魅力の数々。ビルを訪れる人が増えてもまちと繋げられていない無力さも抱えながら、ふらっと来ただけではなかなか得られない面白さに、どうしたら出会ってもらえるのか…広報としての自らの課題にもなりました。
そんな折に始まった新しい広報誌の企画。1号目の編集後記では「まちの人とまちの外の人が繋がる媒体」という言葉を紹介させてもらいました。よそ者だった自分が取材を通して出会ってきた人や魅力に、一歩近づけるチケットのようなものとして、このビルへ訪れる人たちが、この媒体を手に取り、それぞれの視点でまちの面白さに出会っていってほしいと思います。
今後もこの媒体がつなぐ出来事を大事にしていけるよう、いいものをつくっていきたいと思います。

| フリーペーパー解体新書② |

ポットラック新聞 かわら版とは？

媒体概要
A3表裏／モノクロ／毎月発行／3,000部／
2020年3月までに31号を発刊

まちの壁新聞のようなスタンスで港まちの日常的な出来事を取り上げ、毎月ゆるやかに発行している「ポットラック新聞かわら版」。フリーペーパーとしてはちょっと珍しい（？）特徴を持っているようで、手に取った方が驚かれることも。また、嬉しいことに「どうやって作っているんですか？」とお問合せいただくことも。少し手前味噌になりますが、どんなフリーペーパーなのか簡単にご紹介させていただきます。

かわら版の特徴

- 超地域密着型、独特のディープな紙面で、まちの皆さんにも好評。
- 港エリア外からボランティアの編集メンバーが参加。よそ者ならではの新鮮な視点によって港まちの魅力を発掘している。この他、アドバイザーとして関わる編集者の竹内さん・ライターの谷さん、デザイナーの小島さん、そして事務局で制作している。
- まちの内外の人々が、まちを面白がるための共通ツールに育ってきたかも！？
- 港まちでだけ入手可能。読みたい人はぜひ港まちへ！

1 紙面をにぎやかに彩るのは手描きイラスト。
2 最下段には手描き広告も。もちろん掲載は無料。
3 3年間ほぼ毎月発行継続中、まだまだいける!?

かわら版制作の流れ

取材・編集会議
取材をし、記事の割振りからレイアウト案作りまでを1日で行う。（毎月1回）

原稿執筆・イラスト作成
執筆期間は約1週間。

校正
編集の竹内さん、ライターの谷さんに全体のレイアウト、タイトルや文章表現をチェックしてもらう。

DTP・組版
レイアウトや記事などの素材をデザイナーの小島さんに送り、紙面を組んでもらう。

印刷
リソグラフの印刷機で本刷り。

完成！
まちの皆さんには地域の回覧板にて配布。

読み手・作り手からのコメント

かわら版では、これまで編集メンバーたちがまちで出くわした出来事や疑問などを記事にしてきました。そんな記事について、まちの人からしばしばコメントが届きます。ここでは、まちの人や編集メンバーから届いた声をご紹介します。

VOICE まちの人々

港まちの飲食店を紹介する「ひるぶら」がいいね。イラスト付きだからさ、次はあそこに行ってみよう、と参考にしています。

——

かわら版の「どなたかお茶を点ててくれませんか？」っていう広告が目に入ったのよね。お茶ならお手伝いできるかなと思って来てみたの。2回開催したお茶会には、たくさんの方に来ていただけてよかったね。

VOICE 編集メンバーたち

港まちづくり協議会スタッフと編集メンバーという、役割が違う人たちが関わっているのは大事な要素。クオリティを保つことや、発行までの調整をしているまち協の存在は大きい。だからメンバーは、続けていくことにプレッシャーを感じずにかわら版に関わっていけるんじゃないかな。

——

いい意味で「遊び」だから続けられた。楽しくなくちゃ続かない。仕事ではないから責任はないかもしれないけど、関わる上での責任感は持っているつもりです！

かわら版立ち上げメンバーに聞きました

かわら版 虎の巻10ヶ条

あなたも作れる！どこのまちでも作れる！

1. 取材はほぼ一日で

2. 取材前に下調べしない
偶然出会ったものを即興的に楽しむべし！

3. 出会った人に聞いてみる
下調べをしない代わりに、まちを歩いて出会った人と話してみる。
気になったところへは突撃！

4. 基本はアポなし
その方が素顔で話してくれて面白い（笑）！最後に掲載してよいかの確認を！

5. 思ったことは言ってみる
ゆるやかな意見の共有から、自然と紙面が湧き上がる！

6. ハプニングは面白がるべし
ハプニングすら、楽しめてしまえば記事になります！

7. ライター個人の視点で
感性を大切に、書き手にゆだねる！

8. わからなかったことは「わからない」と書いていい
まちの人が答えを教えてくれることも。そこから生まれるコミュニケーション？！

9. 文章はフリースタイル
文体や言葉の選び方にその人らしさが出て面白い。

10. 編集しすぎない編集で
修正は最小限に。
そのぶん、タイトルやレイアウトで編集を効かせる！

イラスト：チンタオ

各地のフリーペーパーに学ぶ

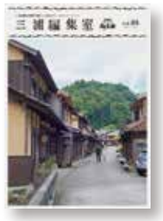
全国には大小さまざまな媒体があり、それらが作られる過程にはドラマがあります。ここでは作り続けていくなかで気づいた大事にしたいことやチャレンジしてみたいことなど、媒体づくりに携わる方々からお話をうかがい、自分たちの中に吸収したい制作のヒントを見つけていきます。※それぞれのコメントはトークイベント「フリーペーパーという広報のカタチ」（開催：2020年2月28日／港まちポットラックビル）より。

| 各地の広報からのコメント |

三浦編集室

三浦 類さん（石見銀山生活文化研究所／群言堂 広報）

島根県のアパレルブランド「群言堂」の掲げる“根のある暮らし”を表現する広報誌。



一個人のリアルな視点

僕は5年間一人で作っていて、悶々と悩みながら、内容どうしようみたいな感じで…。ただ、自分の感じてないことは書かないっていう方針はずっと持っていました。ひたすら一個人の視点で書くという誌面だったので、僕自身が日々この町で暮らしながらリアルに感じていることを誌面に落とし込むっていうのは一つのテーマというか、芯になったのかも。

人の想いを介して会社への想像力につなげる

職場周りにいる人がいかなる人生を歩み、どうやって島根県大森町にたどり着いたのか、なぜ今の仕事や暮らしなのか、誌面の中でインタビューしています。「こういう人が働いてるんだ」「こういう会社なんだ」とか、社内外の人、町の人やお客さんにも、何かしら発見があるような内容になっていると思っています。

それ、いただきます！

企業広報誌にもかかわらず、扱っている商品などは一切誌面に登場しない『三浦編集室』。移住者である三浦さんの目線で綴られる街の様子や暮らしぶりに興味を持った人が大森町に訪れるという。商品とは違った入口から、ブランドのコンセプトである根のある暮らしに出会ってもらうためのツールになっています。
ポットラック新聞タブロイドでも、ポットラックビルで開催中の展覧会を単に紹介するのではなく、誰でも共感できるテーマを設け、街の人やアーティストの別の一面を紹介したいと考えています。展覧会を見るためにポットラックビルへ、だけではない出会いを創りたいですね。

ガジラ通信

田口詠子さん（タグチ工業 広報）

岡山県の建設機械アタッチメントのメーカー、株式会社タグチ工業の社内報。

誰もが楽しめる社内報!?

外部の編集者として、伝説と呼ばれたフリーペーパー『Krash Japan』を作っていた赤星さんにお手伝いをお願いしています。社内報ですが、誰にでも「なんか面白いね」と思ってもらえたらうれしい。社風的にも、「これはこうでなきゃいけない」とかいう考え方の癖がなくて。社長も外に配った方が面白いから配れ、みたいな感じなので（笑）。

コンテンツを再編集すれば二度おいしい

これまで『ガジラ通信』を16号作ってきたことで、商品や製造に関わる写真や説明テキストなどの素材が結構集まってきました。コンテンツマーケティングって言うらしいですけど、それらを、たとえば会社案内のような「採用ツール」っぽく再編集しようかという話も。『ガジラ通信』を社員じゃないのに読んでくれる、いわゆるファンみたいな人たちも大切にしたいですね。

それ、いただきます！

会社での取り組みなどを社員の皆さんにわかりやすく共有する目的で作られた社内報だからこそ、一般読者にとっても読みやすく、会社紹介としても機能している『ガジラ通信』は、誌面からの新しい展開も目指しています。
ポットラック新聞タブロイドの連載「港まちのにぎやかな民俗誌」や、かわら版の各種シリーズ企画なども、別の形で再編集することで新しい企画やメディアとして活かせるはず！

編集メンバー座談会

わかりにくいのかもしれない。でも、この新聞には愛がある。

文：古橋敬一／撮影：三浦知也

私たちの制作現場は、編集の竹内厚、ライターの谷亜由子、デザイナーの小島邦康、港まちでアートプログラムを展開するMAT, Nagoyaのアーティストの青田真也・アートコーディネーターの吉田有里、この他にもイラストレーターの遠山敦、フォトグラファーの三浦知也といったクリエイティブらに支えられている。この多彩なメンバーの創発が制作の大きな推進力になっている。

さまざまな視点をくれる竹内さん

アイデア出しからはじまる編集会議の様子

最後に、10号を目前にしたある日の編集会議の語らいを、竹内リーダーのコメントを中心にご紹介。

ー先日、新聞を見た人に「なんの活動してるかわかんない」みたいな言葉をいただいて…。それを竹内さんに話したら「まぁ確かに」って。僕は、「え?!」って（苦笑。その辺、ちょっと皆さんとも話してみたいなぁと思います。

竹内 ｜ 世の中には施設の活動紹介に特化した、いわばチラシの役割に近いフリーペーパーもあると思うんですね。活動紹介の記事って、そこに興味がないとなかなか読み進められないじゃないですか。だから、ここのはその興味以前に読めるものにしようとして、今の形に行き着いてます。そう、なので活動を伝えるものには確かになってないですよね。その意味では、やっぱりわかりづらい新聞と言われてしまうだろうなと思います。そのバランスを見直して、活動紹介に近づけていく方向性もありますけど。

小島 ｜ いやいや、僕なんかはある芸大生から「これつくっている人なんですか？」って。先生が講義で配ってくれるみたいな。嬉しいですよね。でも、なんというか、大事なことって伝わりにくいというか、当たり前のことなんじゃないですかね。でもひ弱らずに、こちらの大切にしていることをやり続ける方がいいんじゃないかって思いますけど。

青田 ｜ アートもわかりにくいとよく言われますが、わかりにくいということをきっかけにいろいろ考える機会にしたいと思っています。そこの大事さを自分たちで共有してればいいんじゃないですかね。伝わってる人にはちゃんと伝わってる。

竹内 ｜ ポットラックビルでは、2階と3階とで展示を同時にやってることが多いけど、内容は分かれていたりする。でも、紙面上はできるだけ分けたくないとずっと思っていて。だから、まちづくりとアートのどちらかに寄せるんじゃなくて、どちらでもない第3のテーマを置いて、そのテーマに、まちづくりとアートの両方が自然に入るのが一番いいなって。ただ、どっちにも寄らない三角形の頂点にありそうなテーマを探し求めると、毎回、編集会議がトンチみたいになるのは事実です。

谷 ｜ 私はとんちに答えを出そうとは思っていなくて、ずっと考え続けることが楽しい。ポットラック新聞という名前は、このビルを軸にした活動コンセプト。いろんなものが集まったら何が生まれるの？って。そう解釈すると、アートにもまちづくりにも、さらには読者にも寄らなくてよくて、とんちは私も考えるし、読んだ人にも考えてもらえたら。それぞれが謎解きのきっかけづくりみたいなことをやっていけばいい。これは間接的に聞いたんだけど、「愛があるよねこの新聞」って。ちょっと家でウルウルしちゃった。

竹内 ｜ この感じでいけば、この取材や企画はこのぐらいの内容になるだろうなあってわかるのは、ある意味で習熟だと思います。でも、企画を決めた段階で紙面が見えすぎてるものっていうのもやっぱりちょっとテンションが上がらない。しかも、アーティストや街の本当の面白さに実は届いてない、うまく触れきれてないんじゃないかという迷いも常にあって。そう思えば、もうちょっと編集的にイイやり方だとか、うまい取材の組み立てとかもあるはずだって右往左往したい。そうやって誌面をつくっても、もしかしたら読者から見た時の完成度はそんなに変わらないのかもしれない。でも、それでは制作チームとしてはつまらんなぁって。

タブロイドだけでなく、毎月のかわら版にもニヤニヤして、今回もいい新聞ができたなぁと。毎回のように思っています。どんな街にも可能性があるし、誰の日常にもかけがえのない瞬間がある。その素晴らしさを表現したいと願います。もう3年ですが、まだ3年。私たちの挑戦は続きます！

数字で振り返る2019年度データ

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2019 DATA

開催事業数・テーマ別事業パートナー数

項目	開催事業数	テーマ別事業パートナー数
○ 暮らす｜LIVES	108	18
△ 集う｜MEETS	19	109
□ 創る｜CREATES	49	78
名古屋市要望事業	5	5

港まちづくり協議会の活動参加者数

○＋△＋□＝ 延べ22,911人

メディア掲載実績

2019年度のメディア掲載数は計24件でした。昨年度は展覧会のご縁からラジオ番組でご紹介いただくなど嬉しいメディア掲載の流れが実現しました。それと同時にまちづくりの舞台である地域への周知を考える局面も。私達の取り組みをより多くの方に知っていただき、事例や知識を共有することで時代に適したまちづくりが行えるよう周知に努めてまいります。

新聞	WEB	テレビ	ラジオ	雑誌・広報誌	合計
6	11	2	2	3	24

会計報告

2019年度の収入額は71,000,113円、支出額は68,475,644円で収支差額は2,524,469となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が3,541,807円、「△魅力的でにぎやかな港まちに『集う』」が12,519,249円、「□みんなと港まちを『創る』」が52,414,588円（事務局運営費27,080,485円を含む）です。収支差額2,524,469円を名古屋市に返還しました。

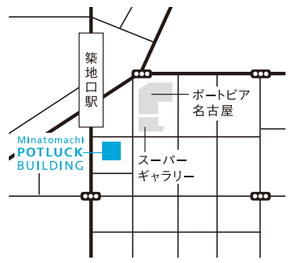
項目	予算額	決算額
収入	71,000,000	71,000,113
支出	71,000,000	68,475,644
○ 暮らす｜LIVES	4,396,000	3,541,807
△ 集う｜MEETS	11,809,000	12,519,249
□ 創る｜CREATES	54,795,000	52,414,588
収支差額	0	2,524,469

（円）

2019年度 港まちづくり協議会メンバー（平成31年4月現在）

会長	早川 勝利（西築地学区連絡協議会推せん）
副会長	坂野 嘉紀（築地口商店街振興組合推せん）
	下村 卓也（名古屋市港区役所区政部長）
委員	河田 正巳（西築地学区連絡協議会推せん）
	鵜飼 茂彦（西築地学区連絡協議会推せん）
	安井 宗敬（西築地学区連絡協議会推せん）
	松本 一男（西築地学区連絡協議会推せん）
	大口 靖夫（西築地学区連絡協議会推せん）
	舘 雄聡（名古屋市総務局総合調整部総合調整室長）
	宮島 葉子（名古屋市市民経済局地域振興部地域振興課）
	花田 彰紀（住宅都市局都市整備部主幹［金城ふ頭開発］）
	箕浦 慎治（名古屋市緑政土木局港土木事務所長）
事務局長	木村 仁
事務局次長	古橋 敬一
事務局員	岡西 康太
	児玉 美香
	大西 未来
	森 希

制作	港まちづくり協議会
編集	古橋 敬一、岡西 康太（港まちづくり協議会事務局）
表紙撮影	三浦 知也
編集アドバイザー	竹内 厚（Re:s）
デザイン	株式会社クーゲート
印刷・製本	東海共同印刷株式会社
発行	港まちづくり協議会
	〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23
	Minatomachi POTLUCK BUILDING
	TEL｜052-654-8911 FAX｜052-654-8912
	E-MAIL｜info@minnatomachi.jp
	WEB｜www.minnatomachi.jp
	2020年11月発行
WEB編集	大西 未来（港まちづくり協議会事務局）
WEBデザイン	プチグラフィックス



Cover story

三浦知也 フォトグラファー

港へ来た。水族館や遊園地、ヤシの木なんかもそこら中にあって、すっかり開放的な気分になり自然と海を目指す。しかし辺りにはたくさんの工場や海運会社があってなかなか海に面した場所に出られない。そこには行く手を阻む憎き柵が！！でもその憎き柵も青いカラーコーンと一緒になってたりしてて、ちょっと可愛いかったりするもんだから、なんか憎めないんですよね。